

【修士論文 2015年度(平成27年度)】

「都市部学生の離島地域との交流活動の継続性に関する研究」

～鹿児島県口永良部島での活動における

モノづくり分野と教育分野の比較において～

論文要旨

近年、離島や農村は人口が減少し、存続が危ぶまれている地域も少なくないが、その解決策として観光地化することや経済的に豊かになることや都市的利便性を得ることに対して疑問を抱く人は少なくないのではないかと考える。しかし、現状の策に対して取って代わるような具体的な解決策はない。具体的な方法はないが、新たな方法として大学生と地域との交流があるのではないかと考える。大学生の可能性に注目し、近年では日本全国で「域学連携」という大学と地域が活動をする動きがある。そこで、本研究では大学生と地域住民の関係性がどうあるべきか、ポジティブに継続していくための方法を明らかにするために大学と地域の交流活動について調査を行う。

今回は慶應義塾大学の教育を専攻とする長谷部葉子研究室と建築を専攻とする池田靖史研究室が行っている鹿児島県口永良部島プロジェクトを対象として研究を行う。そして、専門分野の違う学生の地域住民との交流の頻度や種類の違いを比較することで、学生のプロジェクトの継続性や地域住民との関係性構築の度合いを調査し、継続的な大学生と地域住民の交流のパターンや人数を示す。またそこから、協働でのプロジェクトのマネジメント法を示す。大学生が地域と関わり活動を行うことは観光客とは関わる時間の長さや、交流の種類が異なり深い関係性をもつ「地域側に立った交流人口」となりうるかと考える。また、本研究を行うことで、大学生が新たな知り合いを招くことや、卒業してからも地域と関わる人が増えることが期待できる。本調査は、大学と地域の関係性が win-win になる方法を示すために行う。

本修士論文は、序論(第1章、第2章)、本論(第3章、第4章)、結論(第5章)、考察(第6章)より構成される。

序論の第1章では、各自治体や団体が地域活性化を行うに至った地域格差などの社会問題について整理をし、第2章では既往研究として域学連携について分析を行った。

続く本論では、アンケート調査の集計、大学生の行動追跡表の作成を行い、口永良部島プロジェクトのモノづくり分野の学生の方が教育分野の学生よりも、地域住民との関係性構築とプロジェクトの継続度への関係性が強く、関係性構築ができると継続度が上がる事が分かった。教育分野の学生はプロジェクト活動の満足度が下がるとモチベーションが上がる事が分かった。

結論では、プロジェクトとして活動する夏期のフィールドワーク以外に少人数で島に行く事で関係性を構築することができると、継続度も上がり、その事でまた関係性構築度が上がる循環があることを示した。また、継続度が高い学生は、活動に協力してくれている地域住民と偏りがなく関係性構築をしていることが分かり、地域住民の人数が増加するほど継続度が上がる訳ではなく、広く浅くたくさんの地域住民と関わるより、活動のにおいて重要な役割を担っている人と深く関わる必要があることが分かった。最後に、継続的に大学生の活動が続くためのプロジェクトマネジメント法を示した。考察では、都市部の人々と地域住民の交流のあり方と口永良部島プロジェクトの展望について述べた。

キーワード

1. 交流、2. 継続性、3. 域学連携、4. 地域格差、5. 交流人口